

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720078

研究課題名(和文) 妊娠映画 身体、視覚文化、リプロダクティブ・ライツ

研究課題名(英文) Pregnancy Film: The Body, Visual Culture, and Reproductive Rights

研究代表者

木下 千花 (Kinoshita, Chika)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60589612

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：映画を中心とした日本の視覚文化にける妊娠の表象を発掘し、法、政治、社会、医療をめぐる同時代の言説を参照して、身体に対する女性の自己決定権と女性嫌いを軸として分析した。1930年代後半における映画女優の墮胎スキャンダルと望まない妊娠を題材にしたメロドラマの流行、連合国占領下の優生保護法施行による事実上の妊娠中絶の合法化にともなって浮上した、妻の選択として中絶を捉える戦後民主主義的な映画群について、学会発表を行い、研究論文を出版した。1970年代の「胎児」の表象について北米の妊娠ホラーを題材に研究論文を発表し、現代日本の出産ドキュメンタリーについては上映会を開催し、単著に向けての地歩を築いた。

研究成果の概要(英文)：I examined representations of pregnancy, abortion, and childbirth in Japanese cinema. My archival research brought them into conversation with legal, political, social, and medical discourses on reproductive rights and womanhood at historically specific moments. Specifically, I gave presentations at international conferences and published essays on the following two topics: an actress' abortion scandal and the emergence of what I call a "new seduction cycle" characterized by positive approaches to single-motherhood in the late 1930s; and the relationship between the de-facto legalization of abortion through the Eugenic Protection Law and cinematic representations of marriage, pregnancy, and women's choice in the context of postwar democracy. I also published an essay on the visibility and visibility of the fetus in the 1970s North American modern horror and organized screenings of a documentary on contemporary natural birth. These areas will be further developed in my book.

研究分野：人文学

キーワード：映画学 ジェンダー セクシュアリティ 表象文化論 身体 リプロダクティブ・ライツ 人工妊娠中絶 出産

1. 研究開始当初の背景

(1) 比較表象史

妊娠の表象分析として本研究の出発点となったのは、日本近代文学史を「望まない妊娠」を巡る物語の系譜として照射した斎藤美奈子『妊娠小説』(筑摩書房、1994)である。しかし、日本近代における女性の「産」をめぐる制度・言説・運動が西洋における同時代の動向との対話として展開してきたことを考えると、比較表象史的視点の導入が必要である。

(2) 表象の歴史性

私自身、留学中のアメリカで経験した妊娠・出産の過程で英語・日本語で様々な言説に触れ、「自然」とされている妊娠の経験がいかに文化的に構築されているかに気づかされた。だが、アメリカにおけるプロライフ/プロチョイスの枠組みと、それに対する「他者」として日本文化を見出す文化本質主義の対立は不毛である。近年、歴史学や社会学、政治学分野では、「産」をめぐる政府、家族制度、医療制度、利益団体、メディアの言説を丹念に分析する研究が蓄積されている。本研究もまた、日本の妊娠をめぐる表象の制度の歴史性に注目した。

2. 研究の目的

(1) 「産」の間メディア的表象

映画を中心とした日本の映像メディアにおける妊娠、中絶、出産の表象を発掘・再検討し、人工妊娠中絶についての法制度、超音波をはじめとした画像テクノロジーの医療への導入、フェミニズム運動とそれに対する反動など、1930年代から現代に至る歴史的文脈に位置づけることで、「産」をめぐる女性の身体がいかに可視化され分節化されてきたか分析する。

(2) 映画の身体

テキスト分析と理論的考察を通して、表象のポリテクスと、映画における身体性という問題系を対話させる。重さや疲れ前景化し、過去の性交の痕跡と未来の「予定日」に決定づけられた妊娠の身体を通して、イタリアのネオリアリズム以降の「現代映画」を特徴づける時間性を折り畳まれた身体にアプローチする。

3. 研究の方法

(1) 「妊娠映画」の発掘・リスト化

本研究は、劇映画、ドキュメンタリー、教育/科学映画において妊娠・中絶・出産を中心的な題材とする作品を「妊娠映画」と呼ぶ。有名作品の「妊娠映画」としての見直しから始めるもののそこに留まらず、雑誌・新聞など文字資料を活用して作品名のリストを作成し、ソフト化されていない作品はアーカイヴでの特別映写を申請して「妊娠映画」を発掘する。

(2) 時代区分

(1) の作業と並行して歴史学、社会学、文化人類学の成果を吸収し、墮胎罪の成立(1880/1907)、産児制限(避妊)の広がり、戦中のいわゆる「産めよ殖やせよ」運動、人工妊娠中絶の合法化、人工授精をはじめとした医療テクノロジーの発展など、「産」をめぐる身体の歴史と、戦前およびGHQによる検閲、映画に関する法制度の変容、観客層の変化など、映画史を交差させ、「妊娠映画」の時代区分を行う。

(3) 映画テキストの分析

さらに重点的に分析する映画については、宣伝、興行成績、批評などの資料を蒐集して分析し、原作や同時代の性と妊娠についての言説も参照し、テキスト分析を行い、論文にまとめる。

4. 研究成果

(1) 概要

1930-1950年代の日本映画についてはリスト作成、特別映写、資料蒐集、作品分析を完了し、墮胎法時代(戦前から1948まで)、優生保護法成立・戦後民主主義時代(1948-1956)、若者文化としての妊娠映画時代(1956-1965)、胎児の時代(1965-1974)という時代区分を明らかにした。溝口健二作品についての単著が膨張し、予想以上に時間がかかっているため、妊娠映画についての単著の脱稿という当初の目標は修正せざるを得なくなった。とはいえ、単著の後半部分にあたる1960年以降に繋がる「胎児」の問題や現代の女性映画作家による妊娠映画について、基盤となる研究・調査・コンタクトの確立を行うことができた。

(2) 戦前の墮胎スキャンダルと新しい妊娠映画の興隆

墮胎罪体制下最大のスキャンダルとされる映画女優・志賀暁子の墮胎事件(1935-1937)についてメディアの言説を調査し、この時期に望まない妊娠を扱った映画作品をリスト化し、特別映写を行って分析し、国際学会で発表し、査読論文として出版した(学会発表②③、雑誌論文①)。

この事件をきっかけとして、山本有三や菊池寛のようなリベラルな知識人、山川菊栄や宮本百合子のようなフェミニストによって、映画の文化的地位、職業婦人の職場環境、母性規範という問題が議論されたことを明らかにした。さらに、1937年夏の日中戦争開戦にともなう検閲強化、総動員体制下の映画統制の開始という歴史的な文脈のなかで、これまであまり研究されてこなかった五所平之助『新道』(1936)、成瀬巳喜男『禍福』(1937)、溝口健二『愛怨峡』(1937)などの作品の「未婚の母もの」という側面に光りを当て、志賀事件への映画産業の応答として位置づけた。本研究は、これまで「産めよ殖やせよ」キャ

ンペーンや母性イデオロギーの「表現」として捉えられてきた総動員体制下のメロドラマを女性観客、映画産業、政府の折衝として捉える視座を提示した。

(3) 優生保護法成立期の妊娠映画

連合国占領下、優生保護法の施行・改正(1948, 1949, 1952)によって妊娠中絶は事実上合法化された。このリプロダクティブ・ライツの歴史における転換点についての調査・研究は、溝口健二作品『西鶴一代女』(1952)およびGHQに検閲された1948年版の台本についての論文(引用文献①)を契機に着手していた。しかし、妊娠映画リストを作成し、同時代の言説を分析する過程で、1948年以降の8年間を「戦後民主主義期」とみなし、太陽族映画によって新しい性風俗表現が登場する1956年半ば以降と区分する必要性が明らかになった。

1950年代の日本映画についての論集のなかでサラリーマンの夫と専業主婦の妻、少数の子供による「家族の戦後体制」の形成を跡づけた論文(図書②)では、この時期の妊娠中絶が、平等な個の愛とセックスによる結びつきとしての夫婦、その器としての家庭という極めて戦後民主主義的な性と身体のパラダイムの中で捉えられ、「母」や「娘」ではなく「妻」の主體的な選択として描かれてきたことを明らかにした。妊娠映画リスト作りと特別映写の結果、成瀬巳喜男『山の音』(1954)ばかりではなく、現在ではほとんど語られることのない『女の一生』(亀井文夫、1949)、『或る夜ふたたび』(五所平之助、1956)が重要な作品として浮上り、女性脚本家・水木洋子が戦後の妊娠映画に果たした大きな役割が明らかになった。これらの映画についての歴史研究をとおして、日本では希薄だと言われている女性の「権利」あるいは「抵抗」としての中絶という意識を見出した意義は大きい。

さらに、妊娠映画として語られることのなかった黒澤明『静かなる決闘』(1949)についても菊田一夫の『墮胎医』(1947)の翻案としてGHQの検閲資料に基づいて分析し、国際学会での口頭発表を行った(学会発表④⑤)。

(4) 1970年代の妊娠ホラー

医療テクノロジーと映画の関係について1960年代から1970年代にかけての北米を対象として研究・調査を行い、論文として発表した(図書①)。ハリー・コーエン『悪魔の赤ちゃん』シリーズ(1974/1978/1986)やデイヴィッド・クローネンバーグ『サ・ブルード』(1978)などに見られる胎児や女性の生殖機能の禍々しい表象は、経口避妊薬のFDA認可(1960)、サリドマイド薬害、ロー対ウェイド判決(1973)による人工妊娠中絶の合法化、「試験管ベイビー」誕生など、この時期急速に進行した産のテクノロジー化に対する不安の分節化と考えられてきた(引用文献②

336-59)。

本研究は、胎児の表象に二つの文脈を導入してテキスト分析を行うことで、こうした解釈を踏襲しつつも歴史化した。すなわち、まず、映画製作倫理規定からレーティング/システムへの移行(1968)、キャッチーな広告とメディアミックスに依拠した一斉公開による興行形態「ブロックバスター」の導入(1975ごろ)によるメジャー作品のエクспロイテーション化により、性と暴力の表現は尖鋭化した。さらに、レナート・ニルセンによる内視鏡を用いた胎内映像や搔爬された胎児の写真が*Life*誌で大きくとりあげられ(1965)、産科に導入されつつあった超音波エコーは胎児を可視化し、その結果として「生命」「人間」として析出した。人間と非人間の間に宙吊りされたホラー映画の怪物的乳児像は、このような映画史と視覚テクノロジーの結節点に位置づけられる。

論文執筆の過程で日本における胎児の表象についても調査を行った。すでに妊娠中絶の合法化されていた日本では、*Life*誌の胎児写真特集はすぐに翻訳され(『女性自身』)、中絶の残酷さを訴えるという解釈が行われたことがわかった。今後、単著にまとめるにあたって、1960年代後半の日本映画への胎児の登場との関係を明らかにしたい。

(5) 研究交流

①河瀬直美『玄牝』(2011)の上映会を立教大学・首都大学東京で開いて学生、同僚と出産の表象についてディスカッションし、池田千尋『人コロシの穴』(2002)を静岡文化芸術大学で上映して池田監督と対談を行った。ソフト化されていない作品を分析する機会を得たのみならず、単著のために今後行うインタビューに向けて映画作家とのコンタクトを確立した。

②カリフォルニア大学サンタクルーズ校のシェリー・スタンプ教授と学会発表②をきっかけに研究交流を始め、2013年1月の来日の際には、初期ハリウッドにおける妊娠中絶や産児制限の主題と検閲について首都大学東京で講演していただいた。雑誌論文①は上記発表をもとに、スタンプ教授が立ち上げた雑誌の創刊号への招待投稿である。

③ウエスタン・オンタリオ大学とは交流を続け、妊娠映画について講演し(学会発表④)、英語文献の資料蒐集を行い、日本映画を専門とするマイケル・レイン助教授と意見交換を続けている。

<引用文献>

①木下千花「墮胎の追憶—溝口健二の「好色一代女」とGHQの検閲」、黒沢清、四方田犬彦、吉見俊哉、李鳳宇編『日本映画は生きている』
⑤監督と俳優の美学』、岩波書店、2010年、77-102。

②デイヴィッド・J・スカル『モンスター・

ショー—怪奇映画の文化史』、榎木玲子訳、
国書刊行会、1999年

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

① Chika Kinoshita, *Something More Than a Seduction Story: Shiga Akiko's Abortion Scandal and Late 1930s Japanese Film Culture*, *Feminist Media Histories* 1 no. 1 (January 2015): 29-63、
査読有り
DOI: 10.15125/fmh.2015.1.1.29.

[学会発表] (計 8 件)、すべて単独

① 木下千花、「映倫改組と妊娠映画 (業界内
自主規制と外国映画配給)」国際日本文化研
究センター、共同研究「昭和戦後期における
日本映画史の再構築」、京都府京都市、2014
年8月30日

② Chika Kinoshita, “Something More Than a Seduction Story: Abortion and Entertainment in the 1930s Japanese Film Culture,” *Women and the Silent Screen VII*, University of Melbourne, Melbourne, Australia, 2013年9月30日

③ Chika Kinoshita, “Something More Than a Seduction Story: Abortion and Entertainment in the 1930s Japanese Film Culture,” School of Languages and Cultural Studies, University of Queensland, Brisbane, Australia, 2013年9月27日

④ Chika Kinoshita, “Memories of Abortion: Mizoguchi Kenji’s *The Life of Oharu* (1952) and the Allied Occupation,” Department of Film Studies, University of Western Ontario, London, Canada, 2012年3月28日

⑤ Chika Kinoshita, “Abortion and Democracy: Gender, Sexuality, and Reproductive Rights in Japanese Films under the Allied Occupation,” Society for Cinema and Media Studies, Boston, USA, 2012年3月21日

⑥ 木下千花、「映画の第四次元—溝口健二と「深さ」」、2011年度立教大学公開研究会、立教大学新座キャンパス、埼玉県新座市、2011年12月3日 (招待)

⑦ Chika Kinoshita, “Japanese Cinema under the Allied Occupation,” *TransAsia: Screen Institute, the 2011 Symposium*, Korea National University of the Arts, Seoul, Korea, 2011年11月18日 (招待)

⑧ 木下千花、「表層のクライマックス—木下惠介とクィア研究—」、クィア学会第4回大会、中央大学多摩キャンパス、東京都八王子市、2011年11月13日

[図書] (計 2 件)

① 塚田幸光 (編著)、加藤幹郎 (監修)、鈴木繁、門林岳史、木下千花、『映画とテクノロジー』、ミネルヴァ書房、2015年、分担担当「『胎児』の誕生—『悪魔の赤ちゃん』と1970年代妊娠ホラー」、291 (61-90).

② ミツヨ・ワダ・マルシアーノ (編著)、西村大志、鳥羽耕史、中村秀之、藤木秀朗、木下千花、谷川建司、ハン・ナミ、『「戦後」日本映画論—一九五〇年代を読む』、青弓社、2012年、分担担当「妻の選択—戦後民主主義的中絶映画の系譜」300 (143-70).

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木下 千花 (KINOSHITA, CHIKA)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：60589612

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：